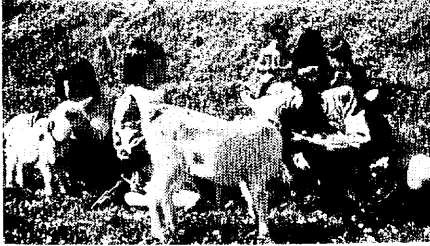


<入植当時の住家>



<山羊と遊ぶ子供たち>



<麓開拓地全景>

× × × × × × × × × × × × × × × ×

カメラ探訪 ①

× × × × × × × × × × × × × × × ×



<薄暗いランプの下で針仕事> (35ミリカメラ F2 8分の1秒 PQ現像)



<縁側でランプのホヤ磨き>

ランプと共に十二年 生き抜いた十四世帯

カメラ探訪最初の試みとして、近く電燈が取付られることになつた麓開拓地を訪ねてみた。やれ管だ、オートメーションだと思ひでいる私たちのすぐ眼と鼻の先に、まだランプ生活に甘んじていた一団が残されていゝたわだ。ここに紹介するのは入植後既に十二年目を迎えるという麓開拓界の一人々のいわば泥まみれの苦闘史である。

たんに甘んじていた一団が残されていゝたわだ。ここに紹介するのは入植後既に十二年目を迎えるという麓開拓界の一人々のいわば泥まみれの苦闘史である。

亡父の遺志継ぐ、二代目も

市内は鶴岡立石の南西から山崎三美、基郡中原村との境に開拓地となつて、開拓に當る難数は六七十米の丘陵、この値吹山一帯に住む十四世帯の住む。才一郎は昭和二十一年二月に三世帯が入植、翌三十二年から二十三年にかけて計四十二世帯がここに入植した。これは当時、終戦と共にますます深刻化した食糧の緩和と失業救済を兼ねて行われた麓地開拓部の真直管事業で、同時に旭と北茂安村のゾロツツを地区として入植している。

入植当初一二年の間は共同開墾、二三年の間は個人開墾となり、中原村の南地区は世帯約二百、北地区は約二百二十反から三反を反当二百、四三村から五百反程度で開墾された。

現在総面積は約千六町、内中原地区は約千六町、北地区は約千四百町、内約五百町である。

この間、生活者に眠さかねた大半の人は離散したわけだが、今日まで残つた麓地開拓の十世帯に計つてみると、職業経験者ばかりで二人だけ、あとは法學士の元島や土建築、軍人、商売を営む

「ちようちゃん」つけて開墾

しかし、何といつても一番辛かつたのは入植後三年目の昭和二十四、五年、入植前用した多少の現金もそのころになるとすっかり使い果し、魔物や家財料まで売らざるを得ない。文字通りのダケノエ生活に陥っていったのもそのころだ。

当時の開墾を大島組会長は「とにかく雨の降る日以外は開墾に明け暮れた。早期から検行をつけて強要する人もあつた位だ。自分でもよく体がもつたものだと思ふ。思ふな位だが、電燈がないから寒い夜は早く休むので体がもつたのではないかと思ふ」と、ランプとの因果を語つてゐる。



眠さあれば馬フン拾い

「一時は団全体が苦しいころであつたが、銀の補助金、國庫となく、銀の補助金等に、財源として時代で現金を持たないことが一番苦しかつた。それでも食ひがちなだけだからやらしいのが、肥料に回す金もないので附近の農家を拾い集めたはとどろだ。」

宮原さんは、早く開墾地への最初の試みとして、中村坊さん(三)は開拓中病死した父の遺骨を掘りだして二代目でも知れるというものだ。中でも

欲しい資金を「技術者」

大島組会長は、これからの世帯には「見通しを」今までの補助金は「ま」もつて、自分の思ひ通りに利用できる。しかし、これは今までの何回か普及的なものを受けただけで、いづれも土地不足の恐れがある。これは今までの何回か普及的なものを受けただけで、いづれも土地不足の恐れがある。

「技術者」である。これは今までの何回か普及的なものを受けただけで、いづれも土地不足の恐れがある。

市内の開拓地調 (資料は鳥居農林事務所調べ)

場所名	総面積	内			入戸数	一般増反開拓面積
		農地	附帯地	宅地		
代 (栢城)	254,829	199,724	48,327	6,708	15	6,221
旭 (立石)	295,711	199,905	88,006	7,800	14	8,207
旭旭 (村田)	183,005	145,617	33,510	3,806	11	4,111

「附帯地」とは新設用の雑木林や牧草用地などの土地
開拓入戸数14は中原村分8戸を含む

